

日本との最初のかかわり

@London

わ たしと日本との最初のかかわりについて書こうと思う。

わたしは学部生のころに、日本語を学ばなかった。ロシア語を選択している。わたしの父親は英国外務省の官僚だった。それであまり問題意識ももたないまま、外交官になるつもりだったのである。大学を卒業したとき、外交官になるには、少し年齢

がEU諸国を訪れて、ひと口チョコレートを食べるとする。あのひと口チョコレートのサイズを決めたのは、他の誰でもない、わたしなのです(笑)。20歳の新人としては結構責任がある仕事をまかされていた、と思う。ひと口チョコレートの大きさを決め、次に車海老の規格を決め、それが終われば、ビール瓶のサイズを統一していく。もちろんそれらが必要不可欠な仕事であることは認めるものの、そんなことを繰り返していくうちに、地位も上がり、わたしは権力を持ちます。どうもそれはわたし向きではない、と感じ始めた。

が不足していた。それで1年間を潰すつもりで、ロンドンのヴィクトリア駅近くにある、環境省の職員となった。

ちょうど英国がコモンマーケット(EU)現在のEU)に正規構成国として加入するときだった。英国と他のEC参加国との間で、基準の統一が喫緊の課題となっていた。

告白します。この夏休みに皆さん

か?」

「今年で18年目です」

上司は、18年間、ずっと官僚を辞めたいと考え続けてきたのだ。ところが、快適だしそれなりに高収入で安定した職種である。それで、彼は国家公務員を辞めることができなかった。誤解のないように書いておくと、この上司はたいへん優秀な官僚だった。優れた業績を残し、のちに功なり名を遂げて、ホワイトホール(ロンドンの霞ヶ関)を勇退した。

でも、自分の18年後の姿がこの上司である、と若いわたしは考えたくなかった。

若いというのは、やり直しがきくことだと思う。わたしは環境省に辞表を提出した。辞表を受け取ったときの上司の哀しそうな顔を、わたしはまだ忘れていない。

役所を辞めると、日本に行った。ひとつには、「公害先進国」だった日本で公害を勉強するために。もうひとつの理由は、ロンドンから遠く離れた場所だったからである。☺